

## Paul Imbs: L'emploi des temps verbeaux en français

moderne, Paris, 1960

原 野 昇

この本は第三部付属問題は別として、大きく二つの部分に分けられる。すなわち第一部用法の問題と、第二部価値（形の内容の）体系の問題である。これはこの本に一貫して現われている著者の現代フランス語動詞時制の問題に関する基本的考え方と一致するものである。

具体的に言えば、第一部では現代作家（19世紀も含めて）の作品からの引用をふんだんに取り入れ、その用例に基づいて説明してある。そこでは、§1直説法の現在、未来、いわゆる「条件法」現在（これは直説法の中に入れてある）、過去Ⅰ（単純過去、半過去、複合過去）、過去Ⅱ（前未来と「条件法」過去、前過去と大過去）、超複合形、§2接続法の諸時制、§3命令形（法）。§4人称形でない形、すなわち不定詞や分詞など、が扱われている。

この項目の並べ方を見ただけでも一部わかるように、第一部における用例に基づく用法の説明はすでに著者自身の判断に基づいた、すなわちそれらの内容（価値）を考えた上での分類、整理の仕方が行われている。例えば、いわゆる「条件法」は直説法の中に入っている。「条件法」現在の形態論的特徴—rais（単数1人称）は直説法未来の形態—r—と直説法半過去の形態—ais—から成っており、その用法も法的用法（les emplois modaux）だけでなく時間的用法もある。〔過去からみた未来。例えば Je pense（現在）qu'il viendra（未来）。Je pensais（半過去）qu'il viendrait（「条件法」現在）。〕ただ直説法未来形よりも法的価値（la valeur modale）がより進んでいるだけだと言う。（p. 61 ff）

直説法現在形の用法を説明するに際しても、まずその態（aspects）から説明し、次に時間的用法、そして法的用法などがそれぞれ例を挙げて説明してある。

あるいは動詞の形態によるもののみでなく、例えば aller+不定詞（近い未来を表わす）や venir de+不定詞（近い過去を表わす）などのような迂説的（périphrastique）表現方法も扱っており、さらに熟語的（慣用的）用法や、未来形や「条件法」の婉曲的用法な

ど文体論の問題も扱われ、母国語人ならではと思われるくらいの鋭い感覚さえうかがえる。

動詞時制の用法の説明に際しこのように広範囲の問題が扱われているということは、とりもなおさず現代フランス語動詞時制の問題が態 (aspect)、法 (mode)、文体 (style) などの問題と切り離して考えることが困難であるからである。例えば過去時制の中の *passé simple* (単純過去) と *imparfait* (半過去) とは、前者が瞬間的行為を表わし後者は繰り返えされた行為を表わす。その差は時間的というよりもむしろ態の問題である。また *plus-que-parfait* (大過去) などは過去のそのもう一つ前の行為を表わし、それは先行性 (*antériorité*) と後行性 (*postériorité*)。さらに同時性 (*simultanéité*) などと対照して考えられるべきものである。すなわち態を表わす形態の体系がフランス語では独立して確立されておらず、しばしば時制と同じ形態で表わされるということである。

その他第一部のいわば理論の説明とでもいうべき問題が第二部で述べられている。そこでは大きく分けて次の四つの事柄が扱われている。§ 1 態 (aspect)。§ 2 時間 (temps)。§ 3 法 (mode)。§ 4 文体 (style) である。

このうち § 2 の時間の問題とは、現実の時と動詞の時制形との問題である。例えば、現実の時間の過去、現在、未来 (*avenir*) の区別はそれ自身相対的なものであるが、それらと動詞の「過去時制」、「現在時制」、「未来時制 (*futur*) 」とは必ずしも正確に対応するものではない。また現実の具体的時間とは関係なく、超時間の時制形と言ってもいいようなものもある。(例えば現在形のあるもの)。

§ 4 の文体の問題は、(第一部の処々にみられる文体論的考察も) 文体論的と言っても、一般化あるいは社会化された文体論的なものすなわち文法的なものという観点に立って、純粹に文体論的というよりもむしろ文法の問題に近いものが扱われているように思われる。

第三部付属問題 § 4 では術語の問題がとりあげられ、上でみたような現行の必ずしも満足すべきものでない術語に対し、著者自身の積極的試案が述べられている。(ただし、この本全体では、読者の便をはかって、伝統的術語が用いられている)

この本は現代フランス語の動詞の形に結びついていて現実の価値 (内容) を、現代作家の作品を通して調査し、その諸価値を整理しそれらの体系において明らかにせんとしたものである。その方法は、対象を現代フランス語に限定した、純粹に共時論的なものである。その説明の方々に図式を利用し、なるべく分り易くしてあり (もともと教育的目的からかかれたものらしい)、現代フランス語の時制だけでなく、動詞について総合的に述べられている好書だと思う。

ただ、題名が示すように、「用法」が中心問題であり、時制、態、法、その他動詞の問題を相関的に深く掘り下げ明晰に論じてあると言うのはやや言い過ぎかと思われる。著者は Introduction で *Il existe à la vérité une surcatégorie de l'aspect-temps à l'intérieur de laquelle temps et aspect se font équilibre* : quand l'un croît, l'autre doit nécessairement décroître (実際は *aspect* と *temps* の両方を含むいわば上部範疇が存在しており、その中では *aspect* と *temps* がお互に均衡を保ち、一方が増大すれば他方は必然的に減少する) と言っているが (P. 15), その上部範疇 (*surcatégorie*) なるものは、その後直接には扱われておらず、余り明確になってこないように思う。しかしいずれにしても、特に我々外国人には有意義な点が多いので、その方面に関心をおもちの方には一読をお勧めしたい本である。

## 言語学関係の学術雑誌について

### 愚 魯 人 録

世界各国で出されている言語学関係の学術雑誌の数はかなりの数に達するが、ここでは広大言語学教室で現に継続購入しているものを一通り列挙することにする。当初は *Language* と *BSL* の二誌しか入れていなかった—いやその二誌を入れるのがせい一杯だったわが教室も、今は20数誌を購入しつつある。もちろんこれとて、世界中の学術雑誌のほんの一部にすぎないし、その上大部分が64年以降入ったものであるから、真に利用できる段階に達しているとは言えないのであるが、読者の参考までに紹介する次第である。記載は、誌名、発行地名、発行国名、教室に現存する巻数 (1964〜とあるは、1964年以降のがあるとの意味)、説記、の順になっている。一応アルファベット順に排列した。

(1) *L'Année philologique, Bibliographie critique et analytique de l'antiquité gréco-latine, Publiée avec le concours de l'U. N. E. S. C. O. et du Centre National de la Recherche Scientifique, Paris* (フランス), tome xxxi (bibliographie —